



人類を揺るがした天文現象【6】

客星あらわる

福江 純

1. 天界を乱すもの

和暦天喜2年5月(宋暦至和元年5月丑の日、ユリウス暦1054年7月4日)、世界の東の果て、日出る国の都では、それまでと同じような一日が繰り返されていた。その日常を覆すかのごとく、丑三つ時の東の空に、眩いばかりに輝く星が出現したのだ。現れた瞬間を目撃したのは天空の異変など気にも止めない社会の外の人間だったろうが、数時間後には京の人々すべてが空を仰ぎみることになったに違いない。

出現した新しい星の最大光輝はマイナス5等で、明けの明星—金星—よりもやや明るく、その光輝は昼間でも見ることができた。新しい星の輝きは次第に薄れ、1ヶ月ほどで金星よりも暗くなり、さらに2年後の春には肉眼で見えなくなって、その姿を消した。

この天空の異変を、人々は驚異と脅威を抱いて眺めていたことだろう。あるものはこの異変を瑞祥と捉えて記録を書き、あるものは凶兆と畏れてやはり記録に残し、そしてあるものは記録にさえ残さずに忘れ去ろうとした。

2. 当時の世界

西暦1054年当時の世界の状況を少しばかりまとめておこう(図1および[1])。

まずヨーロッパでは8世紀にカール大帝の建国したフランク王国が分裂し、神聖ローマ帝国やフランス王国その他、現代に名を残す多くの王国が乱立していた頃である。皇帝・国王を頂点として諸侯や騎士階層からなる王権ヒエラルキーと、教皇を頂点として司教や司祭からなる教会ヒエラルキーという2つの上部ピラミッド構造—封建制—の下に、領主

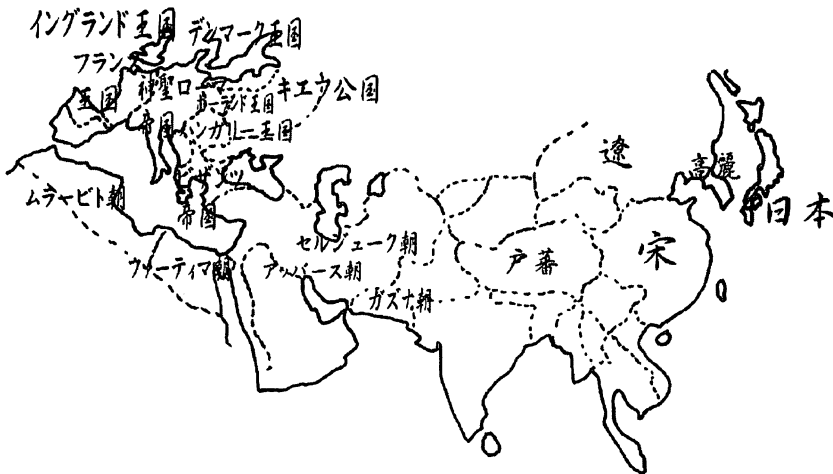


図1 11世紀後半の世界。

と農民からなる下部構造—荘園制—を置いたのが、当時のヨーロッパ封建社会である。

皇帝や国王の力が強まり、1054年には東西教会の相互破門によってローマ=カトリックとギリシャ正教が分離するなど、ローマ=カトリック教会の権威はやや低下していた。しかし教会の力はやはり強大で、たとえば、1076年には教皇グレゴリウス7世が神聖ローマ皇帝ハインリヒ4世を破門し、翌1076年に皇帝が教皇に謝罪するという、いわゆる「カノッサの屈辱」が起きている。さらに1095年には教皇ウルバヌス2世がクレモルン公会議で聖地奪回を提唱し、翌1096年から1291年にかけて、エルサレムに向けてたびたび「十字軍」の遠征が行われた。

ヨーロッパに接したイスラム諸世界では、11世紀という時代は、東はインドの一部からアラビア半島とアフリカ北部を経て西はイベリア半島まで、8世紀から10世紀にかけて広大な地域を支配していたアッバース朝が解体し、セルジューク朝やファーティマ朝、ムラービト朝など、やはり多数の王朝が乱立していた頃である。

インド数学の流れを受けて発達したアラビア数学や、占星術を起源とする天文学、哲学、文学などイスラム文化は、ヨーロッパ文化に多大な影響を与えたが、イラン系の天文学者・詩人オマル=ハイヤーム（1048～1131）が存命していたのがちょうどこの頃である。

アメリカ大陸においては、北アメリカでインディアンの部族社会が成立した一方で、ユカタン半島のマヤ文明は末期であり、メキシコのアステカ文明やアンデスのインカ文明は勃興する以前である。

翻って東洋の中国では、6世紀から続いていた隋唐の統一時代が、唐の滅亡によって907年に終わり、五代十国の乱立時代を経て、10世紀末、宋（北宋）によって再統一された頃である。宋の政治形態は、古代より連続と続く皇帝（天子）独裁制であり、科挙の整備

や富国強兵策が採られていた。儒学的文化としては、宋学（朱子学）が成立し、四書、すなわち『大学』『中庸』『論語』『孟子』が重視された。宗教的には、儒学（儒教）に加え、仏教と道教も普及して^{ひっしやう}おり、3宗教が共存していたといえよう。畢昇が活字印刷術を発明し

客星出現例、皇極天皇元年秋七月、甲寅、客星八月、陽成院貞觀十九年正月廿五日、丁酉、戌時、客星在辟、見西方、宇多天皇寬平三年三月廿九日、己卯、亥時、客星在東成皇東方、相去一寸所、醍醐天皇延長八年五月以後七月以前、客星入羽林中、一條院寬弘三年四月二日、癸酉、夜以降騎官中有大客星、如嬰惑、光明動糧、連夜正見南方、或云、騎陣將軍星稜本體增光歛、後冷泉院天喜二年四月中旬以後丑時、客星出皆參度、見東方、李天闕星、大如歲星、二條院承萬二年四月廿二日、乙丑、亥時、客星……

図2 藤原定家『明月記』の該当部分のイメージ。（藤原定家からみて）過去の客星の出現が、日付・時刻・場所の順にずらずらと書き並べられている部分である。読むと何となくわかってくるから面白い。最後のあたりに件の文章がある。なお6行目の螢惑は火星、歳星は木星、ちなみに金星は太白。なお、コピー資料を見ながら入力したので、漢字の読み間違いが多少あるかもしれない。

て、木版印刷術が普及したのも宋代である。

そして東の最果て、日本では、1054年という年は、794年から1192年にいたる平安時代の後期にあたる。いわゆる摂関政治が全盛の時代で、1016年には藤原道長が太政大臣になって栄華を極めた。その後、11世紀後半には前九年の役や後三年の役によって貴族政治が次第に衰退し、1086年には白河上皇による院政が始まるも時すでに遅く、12世紀にはいと武士が台頭を始めるのである。

3. 残された記録

1054年の客星の出現は、いくつかの文明で記録に残されている[2][3][4][5][6]。

3.1. 日本の記録

まず身近な日本では、藤原定家『明月記』の中、寛喜2年（1230年）に出現した客星の記述に関連して、以下のような一文が記されている（図2）。

後冷泉院・天喜二年四月中旬以後の丑（うし）の時、客星觜（し）・参（しん）の度に出づ。東方に見（あら）わる。天関星に孛（はい）す。大きき歳星の如し。

天喜2年は西暦では1054年にあたる。『明月記』には4月とあるが、これは5月の間違いというのが通説である。中旬は11日から20日ぐらいの間である。したがって、（旧暦の）5月中旬以後は、5月20日～29日あたりになり、現在の暦では、6月19日～28日ぐらいに相当する。ただしこの日付については、6月という説もあるようで、まだいろいろと疑義があるらしい。つぎの丑の時（丑の刻）は、夜中の2時を中心として1時から3時ごろである。よく知られているように、オバケが出てくる時間帯が、丑三つ時だ。客星というのは一時的に出現した天体（星）を指し、超新星・新星・彗星などが含まれる。觜と参は、中国

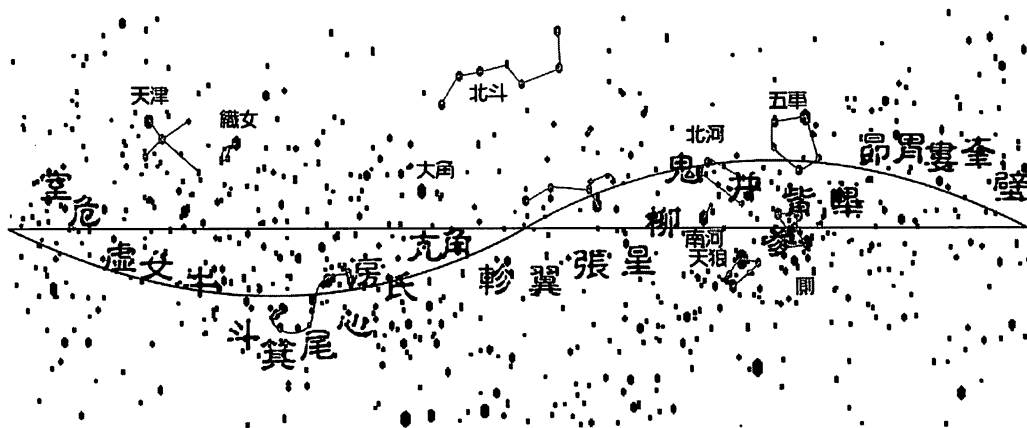


図3 中国の星座28宿。横軸が赤経で縦軸が赤緯の星図上に、28宿のおおよその位置を記してある。中央の水平線が天の赤道で曲線が黄道を示す。28宿は、図の中央（春分点）付近から左に向かって、
 <東の青龍>角（かく）、亢（こう）、氏（てい）、房（ぼう）、心（しん）、尾（び）、箕（き）
 <北の玄武>斗（と）、牛（ぎゅう）、女（じょ）、虚（きょ）、危（き）、室（しつ）、壁（へき）
 <西の白虎>奎（けい）、婁（ろう）、胃（い）、昂（ぼう）、畢（ひつ）、觜（し）、参（しん）
 <南の朱雀>井（せい）、鬼（き）、柳（りゅう）、星（せい）、張（ちょう）、翼（よく）、軫（しん）
 のように並んでいる。

なお、28宿の読み方として日本語的なフリ仮名をつけておいたが、本来はすべて単音節の漢字なので、かなり発音が異なっている可能性は注意しておく。

伝来の28宿(図3)と呼ばれた星座の名前である。どちらもオリオン座にあり、前者はオリオンの頭付近の3つの星を、後者はオリオンの三ツ星付近を指す(図4)。天関星は中国伝来の星名だが、おうし座ζ星のことで、歳星というのは木星のことである。

以上より、おおまかな現代訳は、

平安時代後期の天喜2年、当時の暦で5月20日から29日ぐらい(1054年6月19日~28日)の夜中2時前後に、超新星か彗星が、オリオン座の領域東方に現れた。出現場所はおうし座ζ星付近で、その大きさは木星ぐらいだった。

のようになるだろう。

藤原定家(1162~1241)は、鎌倉時代初期の歌人で、『新古今集』や『新勅撰集』などの選者であると同時に、漢文の日記『明月記』を著した。生没年から明らかなように、定家自身が1054年の客星を見たわけではない。おそ

らく自分自身が見た1230年の客星に触発されて、過去の記録や伝聞を掘り起こしたのだろう。

著者も執筆年も不明だが、『一代要記』と呼ばれる書物にも、『明月記』と同じ記録が記されている。

この『明月記』の記載については、1934年にアマチュア天文家の的場保昭氏が、アメリカの雑誌『ポピュラーアストロノミー』(42巻)に報告したことによって、はじめて欧米に紹介された。その結果、ヤン・ヘンドリック・オールトラが関心をもち、宋史など中国の古記録を掘り起こして、1941年、太平洋天文学会の学術誌『PASP』(54巻)で調査内容を報告した。こうして、1054年の客星の古記録が東洋の古文書に残っていることが、西洋に知られるようになったのである。

3.2. 中国の記録

ではつぎに中国の古記録だが、中国のいくつかの史書に1054年の客星の記録が残されている。たとえば北宋時代の1081年にできた『宋会要』、南宋時代の1168年にできた百科全書『続資治通鑑』、そして1345年ごろに編集された宋朝の正史『宋史』などが有名だ。

さて、『続資治通鑑』と『宋史』の記述はほぼ同じであり、おそらく(朝廷に残された)同一の記録を見たのだと思われるが、以下のようになっている。

客星の出現

至和元年五月己丑の日(1054年7月4日)、客星、天関の東南数寸ばかりの位置に現わる。

客星の消滅

嘉祐元年三月辛未の日(1056年4月6日)、司天監曰く、至和元年五月より客星早朝東に出で天関を守るも、今に至りて消ゆ。

さらに1054年の客星について記載のあるもっとも古い史書『宋会要』では、出現と消滅について、以下のような記述がある。

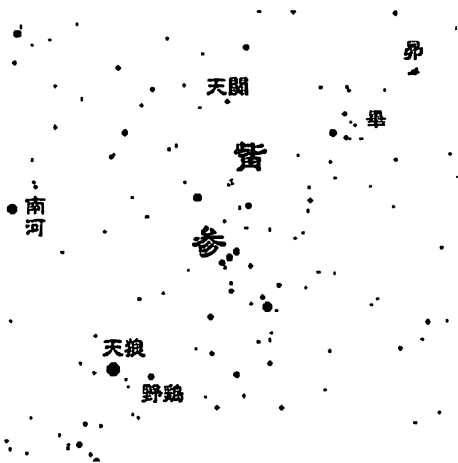


図4 オリオン座近傍の宿(星座)や星の名前の一部。觜(し)、参(しん)、畢(ひつ)は28宿の一部で、天関星はおうし座ζ(ゼータ)星、昂(すばる)はおうし座のプレアデス星団、天狼はおおいぬ座のシリウスである。

客星の出現

(客星の出現から2ヶ月ほど経った) 1054年8月27日(至和元年7月22日)、星学者楊惟徳が時の皇帝仁宗に奏上するには、「畏れながら、客星が現れました。その星はほのかに黄色がかった色で光っています。つつしんで吉兆を占ってみたところ、“客星が畢(おうし座の一部でアルデバラン付近; 図4)を犯しておらず、明るく輝いているので、この国には賢者あり”と出ました。(これは瑞祥なので)史館(歴史記録所)に送って、記録に留めるようお願い申し上げます」。皇帝の詔があり、「史館に送れ」。

客星の消滅

(客星の出現から約2年後の) 1056年4月(嘉祐元年3月)、司天監(帝室天文台長)が言った。「客星が消えて、(天空の)お客が去っていく前兆である。」と。初めは、至和元年5月の早朝に、東方に出現して、天関星(図4)を守っていた。昼間は金星(太白)のように明るく見え、光を四方に放っていた。色は赤と白で、おおよそ23日間は(昼間も)見えていた。

以上のように、中国の記録では、客星は653日の間輝き、天空から姿を消したのである。

...

余談だが、中国で正史とは、皇帝の命によって編纂された公式の歴史書で、ある王朝が興ってから滅亡するまでが完全に記述されるものであるから、当然その王朝時代には書けない。北宋(960年~1127年)と南宋(1127年~1279年)の歴史が記された『宋史』も、それらの王朝が滅亡して後、元の時代にまとめられたものである。正史は、ほんぎ皇帝の記録である本紀と有名人の記録である列伝を2本の柱とする「紀伝体」という記述法で編まれているが、それらになじまない天文、地理、職制、曆などの事柄は、「書」や「志」として記述されている[7]。ようは、中国の正史は国家的大事

業であり、朝廷の歴史記録所の資料を総動員して何年もかけて編纂されるものである。人の武勇伝などは脚色やその逆もあるだろうが、天変地異などはかなり正確だと予想される。

3.3. その他の記録

北アメリカでは、インディアンの部族社会が成立していた。インディアンは洞窟などの壁に岩石絵画を残している。その中には、三日月と円を組み合わせたものがいくつか発見されていて、その種の絵柄がかなり特殊であることや、推定される年代などから、1054年の客星の出現を表したものと主張する研究者もいる。ただし、このインディアンの洞窟壁画については、あくまでも推測の域を出ない。

ところで、中国と並び、当時の世界では文化の中心であったはずの、アラビアやヨーロッパでは、1054年の客星の記録はただの一つも発見されていない。これはきわめて興味深い歴史的現象である。先に述べたように、イスラム世界は四分五裂の時代で統一性が失われていたためかもしれない。ヨーロッパに関しては、当時はキリスト教の教義によって自由な知的活動が徹底的に制限されていた時代であり、天界は不変であるというアリストテレス自然哲学が(キリスト教の教義とマッチして)絶対だった時代である。当時の知的階層だった聖職者たちは、天界の異変を見て見ぬ振りしたのだろう、というのが通説である。

なおここでは省略するが、中国の隣の国家である遼にも、1054年客星の記録が残っていることが知られている。

こうしてみると、客星の出現など、天界の異変は、いろいろな文化に、文化のレベルというよりは文化の質(タイプ)に反映した影響を及ぼしていることがわかる。中国では瑞祥だと喜ばれ、西洋ではシカトされ、そして

日本ではおそらく単純に“あら珍しや”とも思われたのだろう。

4. SN1054

和暦天喜2年5月(宋暦至和元年5月丑の日、ユリウス暦1054年7月4日)に出現が記録されている客星は、現在ではおうし座に出現した超新星であることが確定している。超新星(supernova)の頭文字と出現年から、専門的にはSN1054と呼ばれていて、その名残は、今日、「かに星雲」(図5)と「かにパルサー」(図6)として知られている天体だ。齊藤国治氏命名するところの古天文学の勝利といえよう。

1054年客星の今日的諸元は、である。

念のために書いておくと、かに超新星が地球で観測されたのは1054年だが、かに星雲の

距離は約7200光年なので、実際に超新星爆発

天体名	M1 / NGC1952
固有名	超新星残骸 かに星雲
	中性子星 かにパルサー
位置	赤経 05h34.5m 赤緯 +22° 01′
実視等級	8.4 等
視直径	5′
距離	7200 光年

を起こしたのは紀元前6100年頃、地球は中石器時代で、クロマニヨン人や周口店上洞人が闊歩していた時代である。

超新星が爆発した名残のガス雲であるかに星雲M1(メシエ1)は、メシエ天体の第1番登録天体だが、微細なフィラメント構造がカニの足のような印象を示すことから、「かに

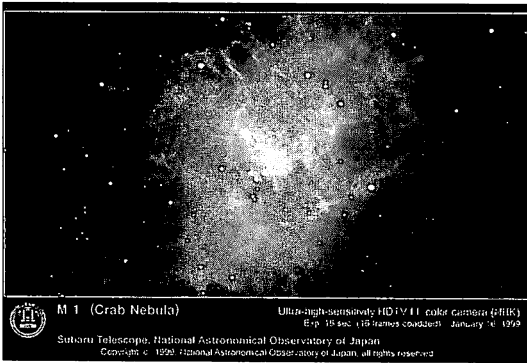


図5 かに星雲(国立天文台すばるホームページ <http://www.nao.org/Gallery/> より)。カラー画像で見ると、水素ガスの出すH α 輝線で彩られた赤いフィラメント構造がよく目立つ。

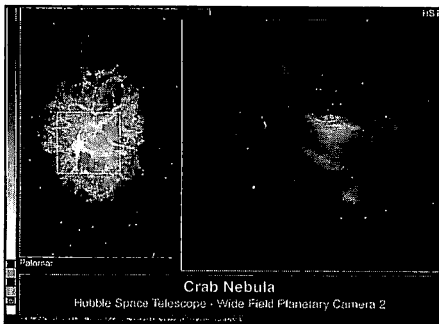


図6 かにパルサー(NASAハッブル宇宙望遠鏡のホームページ <http://opposite.stsci.edu/pubinfo/PR/96/22.html> より)。左側のかに星雲(パロマー天文台)の四角い中央領域を拡大撮影したものが右側の画像(ハッブル宇宙望遠鏡)。右側の拡大画像の中心より少し上側に2つ並んだ星の左側が、中性子星かにパルサー。また拡大画像には、パルサーからのエネルギー放射によって生じた多数のリンク状構造(波状構造)が見て取れる。

星雲」と命名された。かに星雲の中心に存在する中性子星かにパルサーは、半径10km程度、1立方センチあたり数億トンもの密度の中性子物質でできた超高密度天体で、1/30秒もの超短時間で自転しており、自転と同じ周期で正確無比なパルスを放射している。

さて、ここで、超新星とはよく知られているように“星の死”である、として話を進めることができればいいのだが、必ずしもよく知られていないかもしれない。というのも、ごく最近の話だが、HR図を使って星の一生を説明せよ、という設問に対して、“星は新星や超新星として生まれ…”という怪答があったのだ。それも大学入試じゃなくて、大学“院”入試で（ほんとにほんと、実話）。少し

心配なので、一応、星の一生を眺めておこう（図7、図8）。

星は、星間のガスやダスト（塵）が濃く集まった暗黒星雲（星間分子雲）の中で、星間物質が重力的に凝集して誕生する。生まれたばかりの星（原始星）は、ダストを大量に含むガスに覆われているため、可視光で直接見ることはできないが、強い赤外線を出しているため、しばしば赤外線源として観測される。ダストを含むガス雲が晴れてくると（一部は原始星に落下し、一部はジェット流として放出される）、おうし座T型星と呼ばれる核融合反応を起こす前の星（前主系列星）が見えるようになる。

おうし座T型星の中心部では重力収縮に

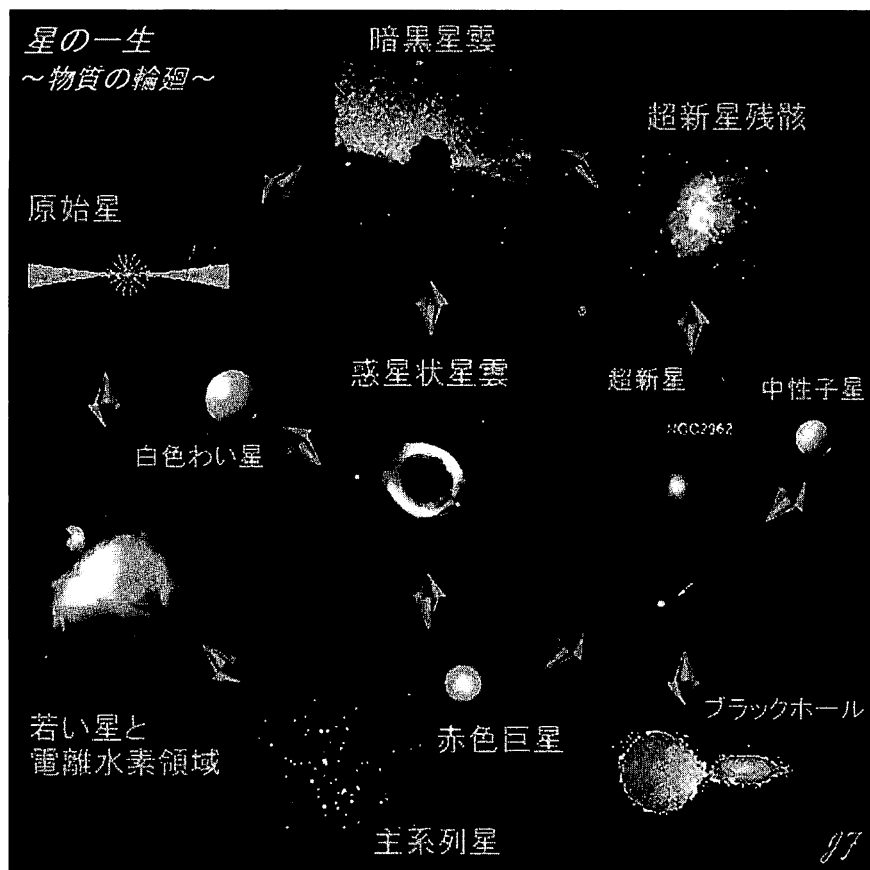


図7 星の一生（栗野諭美他『宇宙スペクトル博物館』より）。星間物質から星が生まれ、ふたたび星間物質に還っていく有様を表している。

伴ってしだいに温度が高くなり、中心温度が約1000万度程度になると、ついに水素がヘリウムに転換する核融合反応が始まる。この状態の星が主系列星である。星はその一生の大部分の時間を主系列星として過ごす。

星はもともとほとんどが水素でできているから、核融合燃料の水素には事欠かないが、いずれは、中心部の水素はほとんどすべてヘリウムに変換してしまう。星の水素の10%程度がヘリウムになると、ヘリウムの灰ばかりになった中心部は収縮し、一方、外層部は大きく膨張して星は赤色巨星となる。

赤色巨星の中心では、ヘリウムの核の収縮によって温度が徐々に上がり、やがて水素のもえかすのヘリウムの核反応が始まる。この段階を過ぎると星は終末期を迎える。たとえば太陽程度の質量をもった星の場合、中心部を残して外層のガスを失い、残った中心部は徐々に冷えてやがて白色矮星になる。星の周辺に放出されたガスは、高温の中心部から放射される紫外線に照らされて電離し、惑星状星雲として観測される。

一方、太陽よりかなり重い星の最後は劇的で、星全体が砕け散る超新星爆発を起こして最期を迎えることになる。たとえば、太陽の4~8倍の質量の星の場合、炭素と酸素の中心

核が収縮した後、中心温度が約8億度に達した段階で炭素に核融合の火がつき、どんどん重い元素ができていく。この炭素の核融合はたった0.1秒程度で暴走し、星はコナゴナに砕けてしまう。これは「炭素爆燃型超新星」と呼ばれている。さらに太陽の約8倍より重い星の場合、核反応は一気に鉄まで進んでしまうが、せっかくできた鉄は周囲からエネルギー（ガンマ線光子）を吸収してヘリウムと中性子に分解する。この鉄の光分解は吸熱反応で、しかもほんの0.1秒くらいしかかからず、その結果、中心核の圧力が一挙に下がって中心核は潰れ、逆に外層は反動で飛び散る。これは「鉄の光分解型超新星」と呼ばれる。

太陽の4倍から8倍くらいの質量の星の場合、超新星爆発の後に何も残らないが、8倍から30倍くらいの質量の範囲では爆発後に中性子星が残る。もとの星の質量は太陽の何十倍であっても、大部分は星間空間に飛び散ってしまい、残された中性子星の質量は太陽程度になる。もっともっと重い星の場合、おそらく太陽の30倍くらいよりも重い星の場合は、中心核は重力崩壊を起してとことん潰れ、光でさえ逃れられないブラックホールになってしまう。

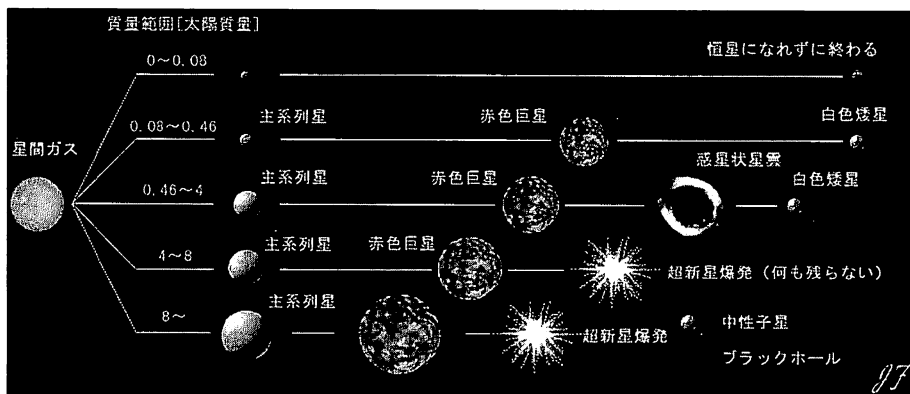


図8 星の終末の違い(栗野諭美他『宇宙スペクトル博物館』より)。質量によって星の死は大きく異なる。軽い星は惑星状星雲を形成して白色矮星を残すが、重い星は超新星爆発を起こして中性子星やブラックホールを残す。

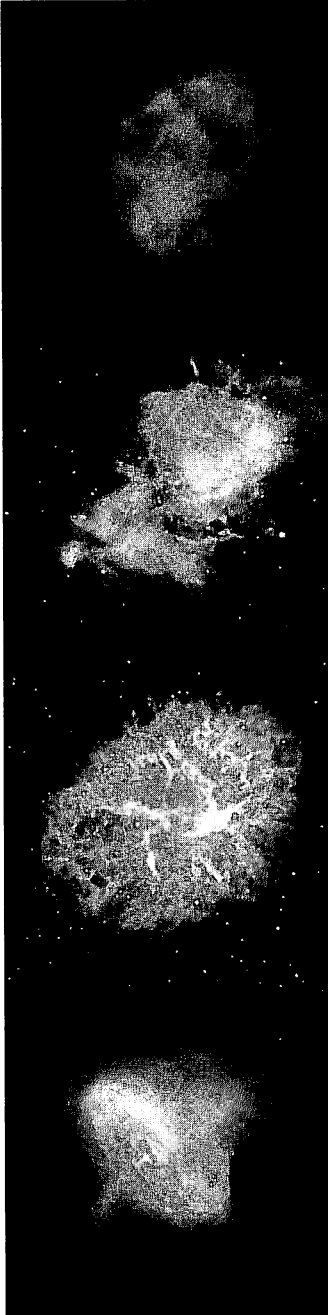


図9 いろいろな波長で見たかに星雲の姿（チャンドラ衛星のホームページ <http://chandra.harvard.edu/index.html> より）。上から、電波（VLA）、赤外線（KECK）、可視光（パロマ）、X線（チャンドラ）の画像。

5. かに星雲の最新像

かに星雲が、光や電波はもとより、強いX線も放射していることは以前から知られていた（図9）。実際、天体からのX線放射の単位としえ、かに星雲（Crab Nebula）から1 Crab という単位が使われているぐらいだ。かに星雲中心のパルサー活動との関連で、X線放射の様子には高い関心もたれていたのだが、X線検出器の解像度があまりよくなかったために、詳しい構造は最近までわからなかった。

しかし、1999年夏に打ち上げられたAXAF改めチャンドラX線衛星によって、かに星雲の驚くべき姿が明らかになったのである（図10）。

ちなみに、チャンドラX線衛星は、もともとアインシュタインX線衛星の後を継ぐものとして、10年以上も計画されていたAXAF（Advanced X-ray Astronomical Facility）と呼ばれる衛星だ。打ち上げが成功した後に、白色矮星のチャンドラセカール半径などを導いた天体物理学者チャンドラセカール（Subrahmanyan Chandrasekhar）に因んで、チャンドラX線衛星（the Chandra X-ray Observatory）と名づけられた。

図10から、中心のパルサーはX線を放射する高エネルギー粒子のリングに取り巻かれているように見える。リングは何重かあって、もっとも外側のものはパルサーから1光年ぐらい先まで広がっている。このリングは、中心天体にガスが落下する際に形成される降着円盤とはまったく別物で、その形成過程はまだ完全には解明されていない。

さらにリング面から垂直方向には、やはり高エネルギー粒子によって形成されたジェット状の構造が、パルサーから双方向に噴出している。これは、活動銀河、近接連星系、原始星などさまざまな階層の天体で発見されている、いわゆる宇宙ジェット現象の一種だと考えていいだろう。一般の宇宙ジェットは、

重力をおよぼす中心天体とそれを取り巻く降着円盤というシステムから噴出していることが多い。しかしかに星雲のX線ジェットは、重力天体としてはパルサー（中性子星）が存在しているものの、周囲には降着円盤システムはないように見える。このことは、宇宙ジェット現象に対しても、新たに大きな謎をもたらしている。

中世の諸世界を驚かした1054年の客星は、いまだその驚異を失っていない。21世紀に入っても、相変わらず天文学の世界を揺るがしているのである。

参考文献

- [1] 帝国書院編集部, 2002, 『世界史図説資料集』, 帝国書院
- [2] サイモン・ミットン, 1970, 『超新星の謎』, 講談社
- [3] 石田五郎他, 1973, 『かに星雲の話』, 中央公論社
- [4] ジョゼフ・ニーダム, 1991, 『中国の科学と文明』, 新思索社
- [5] 斎藤国治, 1999, 『定家「明月記」の天文記録—古天文学による解釈—』, 慶友社
- [6] 以下のHPも参考にした。
<http://www.asahi-net.or.jp/~nr8c-ab/ktjpm1.htm>
<http://www.kusastro.kyoto-u.ac.jp/~usui/teika/teika.html>
<http://centaurs.mtk.nao.ac.jp/~avell/history.html>
<http://www.city.yokohama.jp/yhspot/ysc/izumo/index.html>
- [7] 高島俊男, 2000, 『三国志 きらめく群像』, ちくま文庫

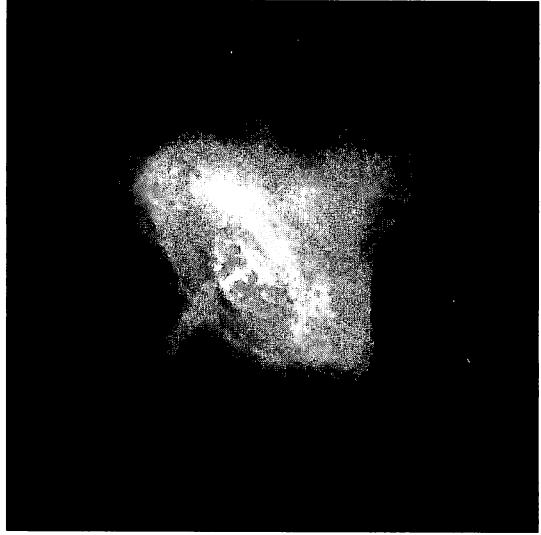


図10 X線衛星チャンドラの撮像したかに星雲（チャンドラ衛星のホームページ <http://chandra.harvard.edu/index.html> より）。画像の一边が2.5分角になっている。



福江 純

fukue@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

補遺 1

本稿を仕上げた後に、幸運にも、京都文化博物館で、「冷泉家展—近世公家の生活と伝統文化」(京都文化博物館、冷泉家時雨亭文庫、朝日新聞社主催、2002年2月16日～3月24日)が開催され、国宝の『明月記』全巻も特別展示された。この機会を逃したら二度と拝めないだろうと思って、入試の一段落した3月に入って見に行ってきたのだが、現物は予想をはるかに越える代物だったので、その印象を補足しておきたい。

客星に関する記述は、定家が69歳のときに書いた、『明月記』第五十二、寛喜二年冬記(1230年)に出ている。この巻は、縦28.7cm、全長2023cmの巻物で、筆を使って漢文体で書かれている(ただし、『明月記』すべてが漢文で書かれているわけではなく、かな文の部分などもあった)。この寛喜二年十一月八日に客星が出現して、それを目撃した定家が客星の様子を記した後に、本文に書いたように、過去の出現例が並べてあった。

さて、本稿をまとめていたときに抱いていたイメージと、実物を見たときの最大の違いは、やはり実物は、“印刷物ではなく、一人の人間の手になるものであった”、ということに尽きるだろう。

まず第一に、当たり前といえば当たり前なのだが、実物は筆を使った肉筆で書かれている。いや、ほくもまさか活字だとは思っていなかったが、それでも天文学史の資料などからは、何となく一つ一つ独立した書体、いわゆる隷書体のようなものをイメージしていた(図2のようなイメージ)。しかし、毛筆で書かれた実物は、字がつながり合った行書体ですらすら書かれてあった(完全にくずれた草書体ではない)。藤原定家は当時の知識人で書くのが商売だったとはいえ、素人目にも達筆なようにみえた(笑)。

定家の書体は、太い部分と細い部分が強調された独特なものだったようで、他の展示物

の説明などを読むと、冷泉家の歴代当主は、定家の文章を書きしつ、書体を真似て残すことが役目の一つだったそうだ。実際、幕末から明治にかけて生きた、最後の公卿といわれた冷泉家第20代当主為理(ためただ)に至るまで、一人を除いて、ほとんど同じ書体である。もっとも、書体が異なった一人の当主というのは、名前はメモし忘れたが、あまりにも書体が定家本人のものに似すぎたために、時の天皇にその書体を禁止されたそうだ。

驚いたことの2つ目は、客星に関する記述部分の取り扱い方の違いである。『明月記』は、もともとは、個人的な日記なので、大部分の文章は反故紙に書かれている。すなわち、当時の紙は貴重品なので、日記の文章などは、公文書などで失敗して反故にした紙の裏側に書いてあるのだ。事実、展示されている大部分では、裏(表)の字が透けて見えている。ところが客星の記述部分は特別で、寛喜二年の客星の記述部分も、過去の出現例の部分も、新しい紙に書いたようであった。また日記の他の部分では、紙の裏側(本来の表側)の上下部分に横罫線のようなものが引かれているが、客星に関する記述部分ではそれもない。

しかも、ここが一番ビックリしたのだが、定家が見たであろう寛喜二年の客星の部分は、日記の他の部分に比べて、特大サイズの字で書いてあるのだ。ちゃんと測定したわけではないが、日記の他の部分の文字サイズに比べると、縦も横も3倍ぐらい、いわば9倍角ぐらいのサイズで書いてある。大きさだけでなく、書体も他の部分より力が入っていて、いかにも気合を入れた感じで書いてあるのが、ありありとわかるのだ。

ちなみに、寛喜二年の客星の記述は、1行9文字から10文字程度で6行にわたって書かれている。一昨日の夜に客星が現れて2日ほどして消えた…というようなことが書いてある

ようだが、よくわからない(^^;

とにかく、天界の異変である客星の出現に対して、定家が驚天動地したさまが、このでかどとした字体に非常によく現れていたと思う。

3番目の驚きは、客星の過去の出現例の記述部分である。本稿をまとめていたときに漁った資料では、図2のようなベタ文だったので、実物も記述がずらずらと続けて書いてあるとびっくり思っていたが、とんでもなかった。きちんと<箇条書き>にしてあったのだ。

すなわち、皇極天皇うんぬん、陽成院うんぬん、宇多天皇うんぬんごとに、改行してあり、しかも2行以上にわたる場合は、2行目以降は字下げするという形で、非常にわかりやすく記述してあった。たとえば、かに超新星の部分は、具体的には、

後冷泉院天喜二年四月中旬以後丑時客星出
觜参度見東方学天関星大如歳星

という感じで、2行にわたって記してある。もちろん、縦書き、行書で、句読点はまったく入っていない。

さらに加えて、この部分は字自体も読みやすい。すなわち、日記の他の部分と比べて、字の大きさは若干大きい程度で大差ないが、字形があきらかに綺麗に書かれているのだ。定家の特徴的なぼつぼつとした書体も、この部分では少し抑えられている。

箇条書きで書かれていることや丁寧に書かれていることから、思いのままに書いている日記と異なり、過去の出現例の部分は、たしかに何か別の記録を書き写したのであることが、門外漢のぼくにも容易に推察できた。

そして、以上の、客星に関する特別扱いの記述部分が終わると、紙の種類も変わり、ふだんの日記に戻っているのであった。

最後に、余談だが、展覧会で販売していた

展示資料集には、残念なことに、『明月記』の資料は掲載されていない。書籍や絵葉書やお土産グッズも多数同時販売されていたが、『明月記』の資料写真などは見当たらなかった。また展覧会の会場は資料保護のために照明がかなり暗くしてあり、禁止の掲示には気づかなかったが、おそらくフラッシュ撮影などはだめなはずである。明瞭な現物写真が手に入らなかった点は、一つ心残りであった。もっともデジタルカメラというものは、薄暗くてもそこそこ写るものではあるが…

(3月12日追記)

補遺2

本稿は、ストック原稿として数号寝かせて置いたのだが、おかげで、さらに面白い情報が入ってきた。

一つ前に掲載されている記事をお願いした白井正さんから伺った話だが、超新星の記述部分は、定家本人ではなく、陰陽寮の役人が書いた可能性が高いようだ。陰陽寮から定家のもとに届いた書状を日記に挟み込んだものらしい。どうりで字体も違うし、丁寧に書かれているはずだ(^^;

もっとも、この話、以前から知られていたわけじゃなくて、今回の『明月記』特別展示で、日記が詳しく調べられてはじめてわかった話だそう(何とまあ、って感じ)。したがって、まだ完全に確立した説でもないようなので、補遺の部分はそのままにしておくが、(実際、ビックリ字体などは、そのままだし)、定家が云々、という部分は、若干割り引いて読んで欲しい。

しかし、さすがに古文書、一粒で何度も美味しかった。

(6月1日追記)